

マイクロ現象学的インタビューの文化人類学的フィールドワークへの 応用についての試論

池原 優斗 (Yuto Ikehara)

北海道大学

本発表の目的は、マイクロ現象学的インタビュー (MPI) の文化人類学的フィールドワークへの応用について検討することである。まず、MPI について本論で論じる要素を中心に紹介する。次に、文化人類学的フィールドワークへの応用の可能性について、再演のフィールドノートへの応用可能性と、個別の経験にアクセスしている際の手がかりのフィールドワークにおけるインタビューでの活用の可能性を提示する。

MPI は記述現象学の方法論で、Petitmengin (2006) でこれが認知科学に応用され、様々な分野へ広がった。MPI は、通常では気がつかない前反省的経験に気がつき、それを正確に記述ために実施するインタビューの方法である。Petitmengin (2018) では MPI の原則として次の三点を挙げている。第一に、エポケーを引き出すことである。これは、被験者が固有の体験を選び、説明することを助けることで、一般論、コメント、信念、判断、説明、理論的知識などの言語化から体験へと被験者を立ち戻らせることによって可能となる。例えば、被験者が抽象的な用語を使った場合には、具体的な説明を求める。第二に、被験者が (直前であるにしろ、より遠い過去であるにしろ) 過去に経験したことを、再演 (re-enact)、喚起できるように助けることである。再演、喚起によって時空間的文脈、また説明されるべき経験に関連する視覚、聴覚、触覚、運動感覚、嗅覚を正確に取り戻すことが重要となる。第三に、被験者の注意を喚起された経験の対象 (What) から、経験のしかた (How) へ向け直すことである。

本発表では MPI の手法の内、経験へのアクセスの方法および、経験との接触の手がかりに着目する。被験者が経験へアクセスするためには、過去の経験を再演する必要がある。再演は、通常は感覚的なきっかけを通して起こるため、意図的に呼び起こすことができない。したがって、経験に結びついた感覚の再発見によって間接的にそれを促すことが必要になる。そのために、まず、時空間的文脈を聞き、次に、視覚的、聴覚的、触覚的、運動感覚的、嗅覚的、味覚的な感覚を正確にしていき、過去の経験がインタビューの状況よりも現在だと感じられるようになるまでこれを実施する (Petitmengin 2006)。また、経験の時間的変化 (通時的側面) を記述するために、MPI のインタビューでは、まず大まかな経験の連続したフェーズを記述してもらい、さらにそのフェーズごとにより詳細な内容を、内容の無い質問によって深掘りしていくことで、通時的な記述を得る (Petitmengin 2018)。深掘りをしていく過程で、前反省的経験にアクセスすることが可能となる (Petitmengin 2006)。

また、MPI では、個別の経験に接触することができているかを判断するための指標も議論されている。まず、一般論等の抽象的な記述や、経験についてのコメント、信念、

判断等ではなく、特定の瞬間や場所への参照等の具体的な記述であることが重要である。そして、回答がインタビュアーの内容のない質問によるものであること、加えて、次のような 3 種類の手がかりがある場合に、記述の信頼性が高いと考えられる。(1) 言語的手がかり：現在形、短く単純な文、動作動詞、具体的な詳細、変な単語や構文、創作された比喻、記述の一貫性、(2) 非言語的手がかり：視線の移動、焦点のずれ、アイコンタクト、水平線を見つめること、ジェスチャー、(3) 共言語的手がかり：語るペースが遅くなる、躊躇、沈黙等である (Petitmengin 2018)。

ここからは、文化人類学的フィールドワークへの MPI の応用を検討する。フィールドでは、その場で録音できない、また、メモを取れない場合が多々ある。したがって、記憶をメモし、それをフィールドノートに清書しまとめていく必要がある。このとき問題となるのは、どのようにして、フィールドでの経験を思い出し、バイアスのかかっていない記述を行うか、という点である。MPI の再演を促すための質問内容は、自らが経験を思い出し、再演をするためにも、応用ができると考えられる。加えて、参与観察において総合感覚的な記述が推奨される (小田 2010) が、MPI が個別の経験に関する五感を記述することに長けており、その点からもフィールドノーツの記述と相性が良いと言えよう。

また、MPI 以外のインタビューにおいても、MPI の質問方法や個別の経験に触れているかの手がかりを部分的に応用することができるだろう。参与観察を行う文化人類学的フィールドワークにおいては日常会話の中で行うインフォーマルインタビューを実施する機会も多い。インフォーマルインタビューでは MPI のような積極的な介入はできないかもしれないが、個別の経験に触れているかの手がかりは、その発言がその経験に対する解釈を語っているのか、経験自体を語っているのかを分析する上で重要な指標となると考えられる。

さらに、MPI の設計思想に目を向ければ、MPI の既存の知識によるバイアスを避け、個別の経験にアクセスをするという設計思想は、自文化を相対化し、別の視点を持つようになる (佐藤 2006) 文化人類学的フィールドワークと共鳴する点があると言えるのではないだろうか。

本発表では、MPI について、本論で論じる要素を中心に簡単に紹介した後、文化人類学的フィールドワークへの応用の可能性について、フィールドノーツ及び、インタビューへの応用可能性を提示した。

【文献】

Petitmengin, C, 2006, "Describing one's subjective experience in the second person: An interview method for the science of consciousness.", *Phenomenology and the Cognitive sciences* 5(3-4), 229-269.

Petitmengin, C., Remillieux, A., & Valenzuela-Moguillansky, C, 2019, "Discovering the structures of lived experience: Towards a micro-phenomenological analysis method." *Phenomenology and the Cognitive Sciences* 18(4), 691-730.

小田博志, 2010, 『エスノグラフィー入門：「現場」を質的研究する』, 春秋社.

佐藤郁哉, 2006, 『ワードマップ フィールドワーク 増訂版：書を持って街へ出よう』, 新曜社.